

公益事業レポート 2012

120周年記念事業

『湧き出る泉のように。創立120周年記念誌』



遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞 授賞式



遠山椿吉記念 第3回
食と環境の科学賞 授賞



「すべての人びとのいのちと環境のために」

すべての人びとのいのちと環境のために

一般財団法人東京顕微鏡院と、これをルーツとする医療法人社団こころとからだの元氣プラザは、創立120周年という節目の年を越え、いま、新しく強く立ち上がっていく時を迎えています。

一般財団法人への移行

東京顕微鏡院は、平成25年4月1日、一般財団法人に移行しました。より自由な事業展開が可能となり、昨年、豊海研究所を開設したこともプラスに作用し、立川研究所と共に事業を展開しております。公益事業もこれまで通り、今後50年間にわたり公益目的支出計画に基づき継続していくこととなります。

また4月1日に設立満10周年を迎えた元氣プラザも、より多くの方々に、心のこもった快適なサービス、科学的信頼性に基づく高い精度のサービスを提供するよう努めており、両法人一体として成長を続けています。

創立120周年記念誌

創立120周年記念事業の一つとして、多くの

方々のご協力の下、創立120周年記念誌を刊行することができました。これまで書かれてこなかった両法人の『戦後事業史』をメインテーマに、両法人の役職員が執筆し、両法人の役職員が読む記念誌と位置づけ、明日に向かってたすきをつなぐ実質的な役割をその冊子に託しました。ぜひ、ご一読いただきたいと思います。

創業の精神

刊行にあたり、私は、1891（明治24）年4月1日に遠山椿吉博士が京橋に「東京顕微鏡検査所」を創立して、120年という年月が経ったことに改めて思いを馳せました。

環境衛生の維持、向上を通して、人びとの健康と社会福祉に貢献したいという120年前の遠山博士の強い思いは、今「東京顕微鏡院」、そしてそこから生まれた「こころとからだの元氣プラザ」という二つの法人の中で脈々として生き続け、発展し、具体的な事業活動を通して社会に貢献し続けています。

今日の両法人の活動の根底に、湧き出でる泉の

ように、遠山博士の「強い思い」がある、といっても過言ではありません。創立120周年記念誌を発刊するにあたり、改めて創立者遠山椿吉博士に深い感謝と敬意の念をささげたいと思います。

一方で、120年を生き続けるということは容易なことではありませんでした。何度も難局に直面しましたが、そこを耐え忍び、また、外部からのご指導、ご支援の手が差し伸べられたことにより、生き続けることができたのです。

120年の活動を支えていただいたすべての方々に、この場をお借りし、心から感謝の意をささげたいと思います。

「健康ないのち」を求めて

遠山椿吉博士の熱い思いを受けて、この120年間私たちが追求し、今後も追求しようとしていることは、一言で表現できます。それは「健康ないのち」ということです。「健康ないのち」が人間にとって何よりも大切なものであることは、いうまでもありません。その「健康ないのち」とは、一体どういうもののでしょうか。

「健康ないのち」とは、「健康なところ」「健康なからだ」と「健全な生活環境」が一体になって機能する姿だと私は考えます。

「健全な生活環境」を追求する東京顕微鏡院と、「健康なところ」と「健康なからだ」を追求する元氣プラザ両法人の一体経営により、「健康ないのち」の維持、向上、増進を追求し続けたいと思います。そして創立120周年を節目として、その熱い思いと決意を皆様と共有したい。そのことが、創立者遠山椿吉博士の思いを受け継ぐ私たちの使命だと強く確信しております。

平成25年 5月

一般財団法人 東京顕微鏡院 理事長

医療法人社団 ころとからだの元氣プラザ 理事長



山田 匡通

創立120周年 記念事業

2011(平成23)年4月1日、東京顕微鏡院と、これをルーツとする医療法人社団こころとからだの元氣プラザは創立120周年を迎えました。記念事業として、このたび両法人の役職員が執筆し、役職員が読む、コンパクトでハンディな創立120周年記念誌を刊行しました。

『湧き出る泉のように。東京顕微鏡院・元氣プラザ創立120周年記念誌』

1891(明治24)年4月1日、わが国で初の民間の顕微鏡検査所として誕生した東京顕微鏡院とその保健医療部門をルーツとするこころとからだの元氣プラザは、おかげさまで120周年を迎えることができました。これもひとえに、皆様方のご支援とご愛顧の賜物と深く感謝申し上げます。

記念事業の一環として、これまで書かれてこなかった『戦後事業史』をメインテーマに、創業から今日に至る事業内容と精神の礎を紹介し、明日の事業展望につなぐ、初めての記念誌が発行されました。



発行日:平成25年4月1日
サイズなど:A4判 本 編 185ページ
資料編 26ページ
発行部数:3,000部
配布先:両法人で働くすべての方々、関係各位、契約先、関係行政機関、関係研究機関、関係団体など
発行者:山田匡通
発行所:一般財団法人東京顕微鏡院
制 作:中央法規出版株式会社

Contents

- ・刊行にあたって
- ・歴代代表者
- ・役員の顔ぶれ
- ・写真でたどる120年の歩み

特別寄稿 これからの両法人に期待すること

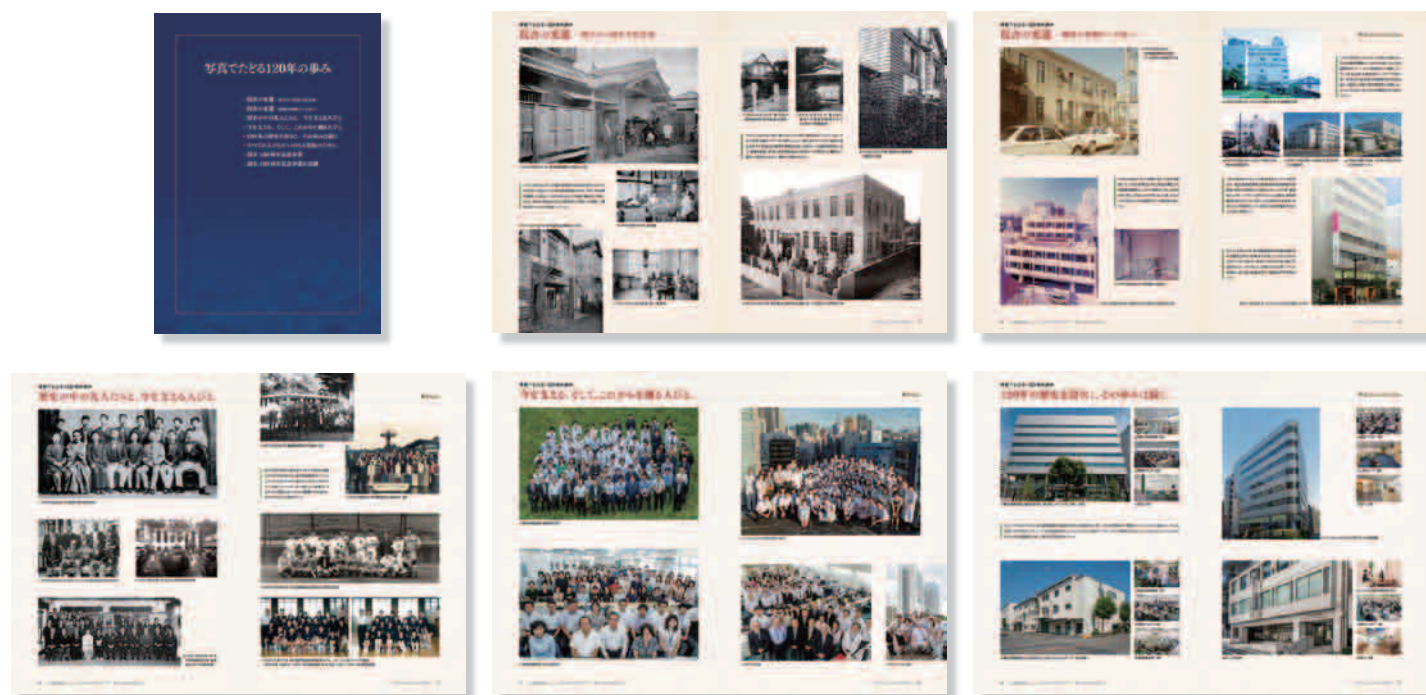
第1章【歩み】「見つめたものは、いのち。」

第2章【今日】「泉、再び。」

第3章【明日】「湧きあがる新しい泉。」

資料編

■写真でたどる120年の歩み



■特別寄稿 これからの両法人に期待すること

(順不同、敬称略)・吉川和夫(元東京都副知事)・遠藤直幸(山形県山辺町長)・伊藤雅治(全国社会保険協会連合会理事長)・尾身茂(独立行政法人年金・健康保険福祉施設整理機構 理事長、名誉WHO西太平洋地域事務局事務局長)・渡邊治雄(国立感染症研究所所長)・門脇孝(国立大学法人東京大学医学部附属病院 病院長)・加地祥文(厚生労働省 小樽検疫所長、前食品安全部監視安全課長)

※抜粋し、本誌P17に掲載いたしました。

■第1章【歩み】「見つめたものは、いのち。」 ●戦前の事業史



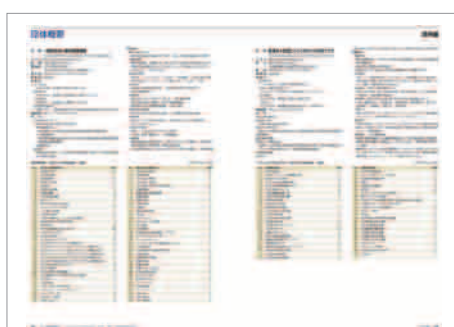
■第2章【今日】「泉、再び。」 ●戦後事業史(まえがき) ●保健医療事業 ●食品・環境検査事業 ●公益事業



■第3章【明日】「湧きあがる新しい泉。」 ●グループインタビュー:①20代スタッフに、仕事、社会への「志」を聞く。 ●グループインタビュー:②中核スタッフが「事業の継続と発展」について語る。



■資料編



学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当法人創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。授賞式では、賞状、記念品、副賞100万円を授与し、記念講演およびレセプションを開催しています。



Tinkiti Toyama Memorial Award
for Food and Environmental Sciences

遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞

平成24年度は、食品の安全と感染症、生活環境衛生を重点課題としました。残留化学物質、天然有毒・有害物質、食品添加物、食品アレルギー、器具・容器包装及び食品やヒト媒介微生物に関する調査研究やこれらの分析法の開発、食品中の放射能汚染など食品の安全に関わるもの、シックハウス、アスベストやダニ、カビなど室内環境、ビル衛生、飲料水の安全性、水と感染症の問題など生活環境衛生にかかわるものを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

本賞は、地道に社会への貢献を追及する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞



小西 良子 (こにし よしこ)

国立医薬品食品衛生研究所
衛生微生物部部長

「マイコトキシンの毒性発現機序ならびに
健康リスク評価に関する研究」

副賞 100万円

遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞 功労賞



石川 哲 (いしかわ さとし)

元北里大学医学部長
北里大学名誉教授

「シックハウス症候群、化学物質過敏症および
関連疾患の診断、治療、疫学、対策に関する研究」

副賞 30万円

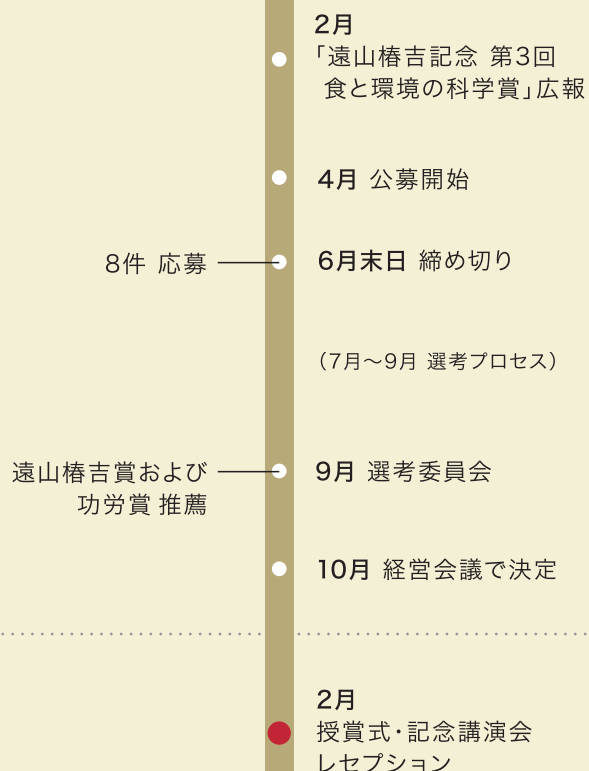
選考の過程

2012(平成24)年2月から学会等120媒体に資料を送付し、57の媒体等を通して募集告知をはじめ、6月末日には8件のご応募をいただきました。



選考プロセスは、一次審査・選考委員会という2つのステップで進めました。一次審査では、8件すべての応募論文を、各選考委員に個別に目を通していただくこととし、4つの評価軸(①公衆衛生への貢献度、②研究・技術の独自性、③技術の普及の可能性、④社会へのインパクト)で五段階評価を付けていただきました。集計した評価票は各委員に事前に読んでいただき、選考委員会では本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を重ねて受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論を踏まえ、当法人・医療法人合同の経営会議で、お二方の授賞が決定しました。





創業者 遠山 椿吉 (とおやま ちんきち)

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年東京医科大学撰科に入学し、衛生学および細菌学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、バクト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顕微鏡』『東京顕微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道德の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日遠逝。享年71歳

2月5日 遠山椿吉賞授賞式

「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2013(平成25)年2月5日(火)にホテル メトロポリタン エドモント(東京・飯田橋)にて開催されました。授賞式には、選考委員の先生方を始め、研究者、報道関係者ほか当法人関係者など、およそ100名が祝福に集まりました。

山田匡通理事長は、小西氏のご研究について、「先見的かつ素晴らしいご研究成果に、そしてまた、人びとの健やかないのちを守るため、我が国の公衆衛生向上にご尽力・ご貢献されたことに感謝申し上げます」と述べ、石川氏のご研究については、「シックハウス症候群、化学物質過敏症患者の苦しみを救うため、また、公衆衛生向上のためご尽力されました。その長年のご労苦に、心から敬意を表します。」と述べました。そして、「お二人の先生方のますますのご活躍、ここにおられる皆さまのご健勝を祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます」と結びました。

平成25年度は、「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」を選考顕彰いたします。

* * * * *

*平成24年度「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」授賞式について詳細は、当法人ホームページをご覧ください。

●撮影協力:栗山 実

遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞



山田匡通理事長より小西良子氏に遠山椿吉賞を授与



石川哲氏に遠山椿吉賞功労賞を授与



受賞記念講演:小西良子氏



受賞記念講演:石川哲氏

■受賞者あいさつ

小西 良子氏 受賞対象となりましたマイコトキシンの研究は、農薬や食品添加物と比べますと、その危害性は一般にはあまり認識されていない分野であります。しかしながら、この分野における我が国の研究者は、私がマイコトキシンの研究をはじめた遙か昔から世界に誇る数々の功績を挙げて参りました。1936年に台湾で収穫された米から黄変米毒の存在を見だし、さらに1954-55年におこった黄変米事件では、黄変米毒を発見しその発がん性を提唱して国民の健康被害を未然食い止めたのは、マイコトキシン分野の研究者でした。また、麦類に汚染するトリコセセン系マイコトキシンであるデオキシニバレノールやニバレノールの発見および構造解析も我が国の研究者でした。

このような輝かしい歴史と先達の研究者達の情熱があったからこそ、今回の受賞につながる研究に発展出来たと思っております。

私が僭越ながら受賞させていただくことになりましたが、対象となった研究は、多くの共同研究者によってもたらされたものです。食品衛生や食の安全に関する研究は、毒性学、分析学、リスク解析学など、広い分野の研究者の共同研究が欠かせません。特にマイコトキシンのような生物由来の有害物質の場合は真菌学の分野は不可欠です。これらの共同研究が、システムティックに行われたことが、高く評価されたものと考えます。そして、このような地道な研究に光を当てていただきまして、本当にありがとうございました。

石川 哲氏 私事になりますが、私の父は2代目の眼科医でした。父は東北大学眼科助教授を経て渋谷で開業しておりましたが、良き臨床家になる為には大勢の人を救う事ができる独創的研究をせよと教えられ育ちました。私も東北大学卒業後東京大学眼科にお世話になり「瞳孔」「毛様体筋」「輻輳」(目を内側に寄せる)機能の研究に熱中いたしました。この機能は脳幹にある自律神経中枢と大脳視覚領野と関係し、もしもその回路に故障が起きると、眼と体の自律神経系機能に異常を来し、とくに視覚系異常を起こすことが解明されつつありました。ここで、有機リン化合物の神経毒性と関係ができ学位も総合医学賞、米国環境医学会最賞:Jonathan Forman Awardもその研究で受賞いたしました。

皆様は化学物質過敏症、シックハウス症候群などを発症させる原因として「有機リン殺虫剤」が35%以上の大きな原因の1つである事を御存じでしょうか?その慢性毒性作用の結果、多くの患者さんが世界中で悩んでいる事を御存じないかも知れません。私はこれらの患者さんを救うことが最も大切な事であると現在でも思っております。これらの研究の推進には、東大、東北大、北里大および私の父の研究費援助など多数の方々の御援助により可能となりました。その研究発展の歴史は決して容易な道ではありません。苦悩と圧迫を跳ね返す事でした。私はその研究に携わってから約50年になります。今回その一部を皆様にお話しできるのは大変光栄に思っております。

今回の賞の御選考にあたり私をお選び戴いた関連の先生方に心から御礼を申し上げます。



◆選考委員長講評

柳沢 幸雄

東京大学名誉教授

昨年2月より募集告知を行い、6月末日には、8件の応募が寄せられました。今年度の重点課題である「食の安全」に4件、「生活環境衛生」に4件、ご応募いただいたわけですが、その一つひとつが、たいへん優れたご研究であり、幅広い分野にわたっておりました。

選考プロセスは、書類審査・選考委員会という2つのステップで実施しました。審査に際しては、本賞の趣旨と今年の重点課題を確認し、一定の選考のフィロソフィーに従って、受賞者を選んだわけでございます。

また、厳正を期すため、応募者と勤務先が同じ選考委員や推薦者である選考委員は、その応募者の評価や審議から外れることとして、選考を進めることとしました。

書類審査では、選考委員全員が、個別に応募書類を審査し、5段階評価しました。評価の軸は、①公衆衛生への貢献度、②研究・技術の独自性、③技術の普及の可能性、④社会へのインパクト、⑤推薦したいテーマと思うか、という5つです。全員の審査票を集計した資料は、あらかじめ各人がよく読んで、選考当日に臨みました。

選考委員会では、食品の安全分野、生活環境衛生分野において一人ひとりを審議し、最終審議に残す応募者を選び、最後に2つの分野をまとめて審議することとしました。

結果、「先駆的かつグローバルな視点」という遠山賞の趣旨に鑑み、小西良子氏を遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞

(遠山椿吉賞)に、また、遠山賞が、「これまで顕彰されることが少なく、公衆衛生向上に貢献した個人又はグループ」を顕彰するという趣旨をもつことから、石川哲氏の非常に優れた長年のご貢献に対しては、功労賞としてその顕彰を選考委員会から推薦することとなり、決定いたしました。

小西先生のご研究は、マイコトキシンの毒性に関して、実験室の実験から厚生行政施策への反映まで、公衆衛生学的視点からシステムティックにアプローチしたものです。強いリーダーシップを持ってその研究をけん引され、国際的にも大きな貢献をした業績として、高く評価できるものであります。

石川先生は、長年にわたり、シックハウス症候群・化学物質過敏症の問題提起から診断法・治療法およびこれらの疾患の対策について多くの業績を残されている研究者であります。そこで、公衆衛生の領域でのグローバルな功績を称え、このたびの「功労賞」特設に至りました。

先駆的テーマであるマイコトキシンの健康被害を防ごうと研究にまい進された小西良子先生、また、シックハウス症候群・化学物質過敏症から患者の苦しみを救おうと、長期に亘って研究してこられた石川哲先生の受賞に、こころより、お祝い申し上げます。

選考委員長として、選考の過程を振り返りますと、この遠山椿吉賞の意義を強く感じます。

公衆衛生や予防医療は、個人個人の先見的な発想力や社会的使命に基づく地道な研究を必要としますが、基礎医学などとは異なり、研究者個人に光があたることの少ない分野であることは否めません。この遠山椿吉賞が、今後とも多くの優れた研究者の業績に光をあて、その偉業を公に称えることで、次世代を担う後進の育成にもつながれば誠に幸いであると思います。



◆来賓祝辞

熊谷 進

内閣府食品安全委員会 委員長

この度は、国立医薬品食品衛生研究所衛生微生物部長でおられます、小西良子先生におかれましては科学賞、それから元北里大学医学部長で、同大学名誉教授でおられます石川哲先生におかれましては、功労賞を受賞されたということに対して、長年来の研究の同志として心よりお祝い申し上げます。

小西先生は、これまで食品衛生上重要な健康被害因子でありますマイコトキシン、これはカビ毒とも言いますが、につぎまして、さまざまな角度から研究を進めてされましたが、この度はその毒性発現機序、それから健康リスク評価についての研究で受賞されました。特にわが国の麦類での汚染が問題となる、いわゆる赤かび病菌が産生する毒素につぎましては、動物を用いた免疫機能と内分泌機能に及ぼす影響、それから、その機序について研究を進めまして、その成果は広く国内外の関連研究者により高い評価を受けております。わが国のみならず、国際機関におけるマイコトキシンの健康リスク評価にそれら成果は生かされてきました。

また、食品の検査に必要な分析方法の開発研究や、わが国における食品汚染の実態調査に関しましても、研究班を立ち上げ、そのリーダーとして着実な成果を挙げ、わが国の食品衛生

行政に必要な食品の規格基準の設定、あるいはその基礎となります健康リスク評価に貢献されてされました。こうした業績は食品衛生に貢献するところ極めて大きいものでありまして、まさに今回の受賞にふさわしいものと言えるかと思えます。

石川先生におかれましては、有機リン中毒をはじめ、微量環境化学物質による健康影響に関する研究分野におきまして、多大な貢献をされてされましたが、この度は社会的に大変重要であり、また今日的な問題でもありますシックハウス症候群や化学物質過敏症に加えまして、関連疾患の診断、治療、疫学、対策に先駆的に取り組まれてこられたことに対し、功労賞が贈呈されました。

石川先生はこれら研究を先導する中で、基礎医学あるいは臨床医学的な立場から問題提起をされ、診断法や治療法を含め、これら疾患の対策に大きく貢献されてされました。特に、空気を汚染している微量化学物質の人体影響に関しまして、環境要因を探り、診断法を確立し、世界に発信してこられたことは、まさにこの功労賞にふさわしい、輝かしい功績と言えるのではないかと思います。

以上のように、今回受賞されたお二人の先生方のご業績は、遠山博士が追求された公衆衛生向上、さらに予防医療推進という目標に合致するものでありまして、食と環境の科学賞受賞にまさにふさわしい内容を持つものと言えるかと思えます。お二人の先生には、今後のさらなるご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

学術振興

学会への助成活動、医師や職員による研究発表

東京顕微鏡院は、1989(平成元)年4月以降24年間にわたり「日本食品微生物学会」に事務局機能を提供し、2011(平成23)年より日本カンピロバクター研究会の事務局を務めるなど、保健衛生分野における学術振興に努めています。また、医事衛生の研究及び振興に資するため、医師や職員による調査研究活動に力を入れています。

◇学会活動

①「日本食品微生物学会」への助成

当法人は、1989(平成元)年4月より学会事務局を担当し、学会の発展に貢献しております。

日本食品微生物学会は、「食品の微生物および寄生虫に関する学術研究の推進、並びにその成果の普及を図り、食品の安全および機能の向上に寄与すること」を目的としています。会員数は個人・法人を含めて約1,200を有し、その半数は民間企業の所属であり、企業・研究機関・行政のいわゆる産・官・学で構成されています。



第33回 日本食品微生物学会学術総会

年1回行われる学術総会のほか、全国各地で学術セミナーを開催し、会員のみならず一般消費者や日々食品関連の仕事に従事していらっしゃる方々に、食品微生物の正しい知識や衛生管理等の最新情報を提供



する活動を行っています。

第33回日本食品微生物学会学術総会(平成24年10月

25～26日:アクロス福岡)では、当法人伊藤武理事がランチョンセミナーにて、「国内外における腸管出血性大腸菌食中毒の動向と課題及び検査法」と題する講演を行いました(スライドは、当法人HPにて公開)。また、調査研究室 和田真太郎、森哲也、食品微生物検査部 鎌田有希、微生物検査部 馬場洋一が学会発表を行いました。

(TOP>公益事業>日本食品微生物学会)

②日本カンピロバクター研究会への支援

「日本カンピロバクター研究会」は、細菌性下痢症の最も主要な病原菌である本菌の研究・調査・感染症制御など様々な分野の検討を行い、国民の保健医療や食品衛生に貢献することを目的としています。当法人は平成23年度から事務局を務め、学際的な研究の推進を支援しています。

平成24年11月30日～12月1日には、大阪府立大学りんくうキャンパスりんくうホールにて、「第5回日本カンピロバクター研究会 総会」を開催いたしました。



第5回 日本カンピロバクター研究会 総会

◇医師や職員による調査研究

平成24年度は、予防医療に関するテーマで2題、食と環境のテーマ5題に対し、研究助成を行いました。新たな検査法の開発など、明日を切り拓く研究活動が行われています。

平成24年6月15日には、平成23年度研究成果発表会を開催し、理事長、役員職員参加のもと活発な質疑応答が交わされました。平成24年度の研究発表会は平成25年6月20日に行う予定です。



平成23年度 研究発表会

《平成24年度の研究内容》

①「子宮頸がん検診者におけるHPV感染者の把握とTypingの調査・研究」(3年目)※1

代表者:石井保吉(医社)こころとからだの元気プラザ 臨床検査部 部長

②「尿中ミオイノシトールの実用化に向けた応用研究」

代表者:山縣文夫 当法人理事

③「パッシブサンプラーを活用した総揮発性有機化合物(TVOC)測定法の開発」(2年目)※2

代表者:瀬戸博 当法人 食と環境の科学センター 環境検査部 技術顧問

④「食品の脂質中に含まれるトランス脂肪酸、飽和、不飽和脂肪酸およびコレステロールの含有量調査」

代表者:水野竹美 当法人 食と環境の科学センター 食品理化学検査部 技術専門科長

⑤「貯水槽水道における水の滞留や不適切な管理による水質の悪化とその対策に関する研究」

代表者:林田瑞穂 当法人食と環境の科学センター 微生物検査部部長

⑥「牛胆汁の個体差と病原菌および衛生指標菌の消長」

代表者:和田真太郎 当法人 食と環境の科学センター 調査研究室 主任

⑦「環境からの腸管出血性大腸菌検査法に関する基礎的検討」

代表者:森 哲也 当法人 食と環境の科学センター 調査研究室 主任

*上記の研究報告は、当法人平成24年度事業年報にて掲載予定。

※1 同研究について、石井保吉部長が第51回日本臨床細胞学会秋季大会(平成24年11月8日～10日)にて、発表いたしました。

※2 同研究について、環境検査部 山田智美が平成24年度室内環境学会学術大会(平成24年12月15日～16日)にて、ポスター発表を行いました。

普及啓発

(メンタルヘルスセミナー)

働く人たちのこころの健康づくり

メンタルヘルス対策は、すべての企業の大きな課題であり、東日本大震災後の厳しい経済情勢のなか、日本のメンタル問題はさらに難しい局面を迎えたといわれます。昭和60年より職域のメンタルセミナーを推進してきた当法人は、120周年を機に、公益事業の柱として3年計画のメンタルセミナー企画を立ち上げ、2年目を迎えました。

本年度は「働く能力」をキーワードに「復職支援」をテーマとしました。

「職場復帰支援とは、単に職場復帰だけでなく、以前のように働けるようになることが基本的な目標になるべきではないか」企画会議では、こうした問題意識を起点として、産業保健の立場、企業・人事の立場から意見交換できる場の設定に努め、5回の会議を通して実践に役立つプログラム作りを目指しました。

結果、セミナー参加率、満足度共に約9割と、多くの共感が得られ、ワークショップ参加者からは、人事と産業保健の担当者交流により、様々な気付きが生まれた、との声が多く寄せられました。

◎平成24年度コーディネーター：

森 晃爾（産業医科大学産業医実務研修センター長）

白波瀬丈一郎（慶應義塾大学医学部

精神・神経科学教室講師）

及川孝光（当医療法人 統括所長）

■メンタルに関するセミナー

人事・労務管理スタッフ、メンタルヘルス推進担当者、衛生管理者、医師、保健師・看護師等の皆さまに役立つ実践セミナー

◎平成24年度メンタルセミナー 3回シリーズ 第1回

◆『みんなで頑張っていける「職場復帰支援」を考える』



◎日時：平成24年7月25日(水)13:30～16:30

◎会場：大手町ファーストスクエアカンファレンス

◎参加者数：142名

◎参加費：2,000円

◎総司会：及川孝光、森 晃爾

◎参加方法：

A. 第1回(7/25のみ)

B. 第1回+グループワークシナリオ・ロールプレイ”(9/26、11/28)

C. 第1回(7/25)+グループワーク「手順書作り”(9/26、11/28)

※B,Cについては、第1回受講時にセミナー会場で申込書を配布。

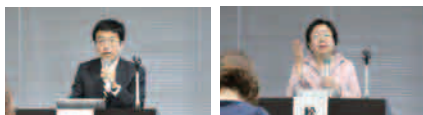
■基調講演：「固定観念へ挑戦、そして『育て鍛える』職場復帰支援」 白波瀬丈一郎



■パネルディスカッション：

『『働く能力』の再生・向上を目指した職場復帰支援の実現』

◎パネリスト：白波瀬丈一郎、前田一寿（株式会社ロプ代表取締役社長）—企業・人事の視点から
松井知子（杏林大学保健学部健康教育学教室講師）—産業精神保健・臨床心理の視点から



前田一寿先生

松井知子先生

■ワークショップ

◎平成24年度メンタルセミナー 3回シリーズ 第2・3回

◆みんなで頑張っていける 「職場復帰支援」を考える 実践型ワークショップ

◎日時：第1回：9月26日(水) 第2回：11月28日(水) 13:30～16:30

◎会場：大手町ファーストスクエアカンファレンス

◎定員：各コース20名

◎参加者数：Aコース11名 Bコース15名

◎参加費：2,000円



◇Aコース[職場復帰支援のシナリオ・ロールプレイ]

・コーディネーター：白波瀬丈一郎、吉川徹

・対象：職場復帰支援において具体的な計画立案や面接を行う産業保健職等

・内容：メンタルヘルス不調者の復帰準備性を評価する面談のシナリオを用いて、ロールプレイを行う。参加者は3人1組になり、メンタルヘルス不調者、人事担当者（または産業保健職）、観察者の役を順番に交代で演じながら、それぞれどんな気持ちになるのかを体験する。その体験を通して、グループワーク形式で適切な態度や接し方を学ぶ。



Aコース[職場復帰支援のシナリオ・ロールプレイ]
中央は白波瀬先生

◇Bコース[休業者の職場復帰の手順書作り]

・コーディネーター：森晃爾、及川孝光

・対象：職場復帰支援において制度設計を行う担当者等

・内容：架空の会社の事例を設定し、4～5人のグループワーク形式で手順書作りを学ぶ。病欠休業開始から職場復帰後のフォローアップまでのステップを理解し、自社に持ち帰って活かせるよう、事業場の実態に即した具体的な職場復帰支援プログラムの策定方法を学ぶ。



Bコース[休業者の職場復帰の手順書作り]
上手でファシリテーターを務める森先生

■次のステップ

平成25年度は、23・24年度の振り返り（東日本大震災後の問題意識、KEAP*の紹介と実践型ワークショップの成果）からスタートし、こころの健康支援のための職場環境改善をテーマとすることとしました。参加者の経験・悩みを持ち寄り、グループワークを通して皆で改善していく、実践型形式をとる予定です。

*KEAP(KEIO Employee Assistance Program、慶應義塾大学病院が運営する、メンタルヘルス支援プログラム)：メンタルヘルス不調者の「働く」能力の再生と、それを取り巻く人々の「働く」能力の向上を図る。

普及啓発 (健康セミナー)

働き盛りからの予防医療の普及開発

平成20年度から『健康日本21^{※1}』に基づく健康セミナーシリーズを展開。「人生80年代」に健やかな老後を過ごすため、働きざかりから始める健康づくりを重点課題として、「健康寿命の延伸」や「生活の質の向上」に役立つ講演会を企画しています。また、今年度より「女性の健康週間^{※2}」に合わせ、女性の健康に関する普及啓発を始めました。企画は公益会議^{※3}を通して多くの方のご意見を傾聴し、組み立てています。

※1 21世紀における国民健康づくり運動 ※2 毎年3月1～8日に開催 ※3 P16参照

①健康に関するセミナー

◎シリーズ『働きざかりから始める、人生80年代の健康づくり』全2回
(会場は第13回：女性就業支援センター、第14回：全電通労働会館ホール)

◆10月24日「働き世代から始める
ロコモ対策—いつまでも自分の足
で歩くために—」(参加者数：257名)

講師：泉田良一(江戸川病院 慶友人工関節
センター長、ロコモチャレンジ!
推進協議会委員長)

司会：及川孝光(当医療法人 統括所長)

後援：厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡
協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会、日本
整形外科学会、ロコモ チャレンジ推進協議会



近年、わが国では高齢化社会の到来とともに、介護を必要とする人が増えていますが、要介護になる原因の一つがロコモティブシンドローム(ロコモ)—すなわち、骨・関節・筋肉などの運動器が加齢や病気のため、痛みや機能不全を来し、生活に支障がある状態です。運動器の衰えは40歳代頃から徐々に始まると言われ、要介護とならないためにも早めの対策が必要です。



整形外科がご専門の泉田良一先生にロコモを引き起こす要因から予防方法、改善につながる実技などを交えながら、わかりやすくご紹介いただきました。

◆12月14日「時間栄養学による
生活習慣病の予防」

(参加者数：424名)

講師：香川靖雄(女子栄養大学 副学長)

司会：及川孝光(当医療法人 統括所長)

後援：厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡
協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会



「時間栄養学」とは、時間の流れを考慮した栄養学です。今までは食べる時刻、速度、順序についての食事摂取基準は定められていなかったのですが、これらが生活習慣病の発症や健康寿命に大きな影響を与えることが判りました。



今回のセミナーは、シリーズ最多の参加者があり、関心の高さが伺えました。長年時間栄養学のご研究をされている香川靖雄先生より、時間栄養学に基づいた生活習慣病の予防について、わかりやすくご紹介いただきました。

(全2回シリーズの講演内容を、講師の先生方のご理解・ご協力により、小冊子に編集しました⇒P13)

②女性の健康に関するセミナー

◎シリーズ『元気に働き、人生を楽しむ女性の健康講座』第1回
(会場は女性就業支援センター)

◆3月4日「女性のライフサイクル
と健康管理」(参加者数：123名)

講師：吉村泰典(慶應義塾大学医学部
産婦人科 教授)

小田瑞恵(当医療法人理事、診療部長)

座長：大村峯夫(当医療法人理事)

後援：東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本
産科婦人科学会、日本生殖医学会、日本女性医学
学会、日本女性心身医学会、日本臨床細胞学会



我が国では女性の社会進出が進むのに伴い、出産年齢の高齢化など女性のライフサイクルは大きく変わりました。今回は現代女性のライフサイクルの変化を踏まえ、不妊治療の第一人者である吉村泰典先生にライフステージごとの健康管理について、当医療法人診療部長の小田瑞恵先生より子宮頸がん検診の意義と早期発見のメリットなどについて、それぞれ女性ならではの健康づくりをわかりやすくお話しいただきました。



(吉村先生のご理解・ご協力により、当法人HPにて、当日のスライドと動画を公開しています。
TOP>公益事業>セミナー>平成24年度の実績)

普及啓発 (食と環境のセミナー)

食と環境のセミナー

◆6月1日

第81回 食と環境のセミナー

『放射性物質と内部被曝を考える』

(会場:日本橋公会堂 参加者数:253名)

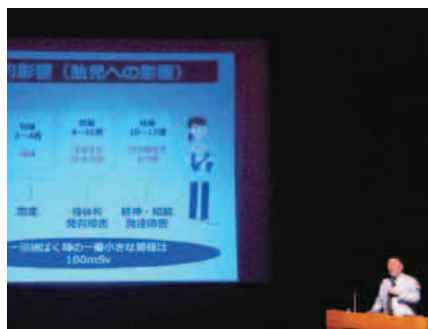
「食事調査から見た内部被曝の評価」

講師:小泉昭夫(京都大学大学院医学研究科
環境衛生学分野教授)



「低線量被曝の健康影響」

講師:渡邊正己(京都大学名誉教授 放射線
生物研究センター・特任教授)



身近な食や環境の問題について

当法人では、企業の食品衛生担当者と環境衛生担当者対象のセミナーは、昭和51年より30年以上にわたって開催しており、最先端の食や環境の情報提供に努めています。第81回 食と環境のセミナーは「放射性物質と内部被曝を考える」と題して開催し、消費者や食品関連担当者に最新の情報を提供いたしました。

「放射性物質検査法の現況」

講師:安田和男(当法人豊海検査事業部担当理事)



平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、福島第一原子力発電所において事故が発生しましたが、その後、各地で農産物などから暫定規制値を上回る放射性物質が検出されたことから、食の安全に対する消費者の不安が高まっていました。

本セミナーでは、小泉昭夫先生に「食事調査から見た内部被曝の評価」と題し、福島で行った陰膳方式による調査から分かった内部被曝評価について、また渡邊正己先生には「低線量被曝の健康影響」と題し、内部被曝検査データの読み解き方と低線量放射線の健康影響についてご講演いただきました。また、検査機関である当法人より、放射性物質検査法の現況を報告いたしました。

(講師の先生方のご理解・ご協力により、当法人HPにて、当日のスライドを公開しています。TOP>公益事業>セミナー>平成24年度の実績)

◆11月1日

第82回 食と環境のセミナー

(会場:日本橋教育会館 参加者数:170名)

「食品の製造工程における食物アレルギー対策」

講師:佐々木祐(東京都健康安全研究センター広域
監視部食品監視第二課 食品機動監視係長)

「食品表示を考える～偽装の歴史と一元化の議論～」

講師:中村啓一(財団法人食の安全・安心財団
外食産業総合調査研究センター 事務局長)



◆3月4日

第83回 食と環境のセミナー

(会場:日本橋教育会館 参加者数:115名)

「2010年代の食品産業の変革期「足元の常識を疑う」ことによる需要の開拓」

講師:新井ゆたか(水産庁漁政企画課課長)

「食品に使用される保存料等に関する話題と作用機構」

講師:西島基弘(実践女子大学 名誉教授)



■「食品と環境」衛生講座シリーズ①



「食品従事者必携:ノロウイルス食中毒 予防と対策」

(※「結婚式場におけるノロウイルス食中毒対策」の改訂版)

ノロウイルス食中毒は、飲食店で提供された食事、ホテル・結婚式場で提供された宴会料理のみならず、仕出し弁当、学校・病院・事業所の給食など、さまざまな料理あるいは食品製造業加工された食品などで発生しています。平成22年度に発行した「結婚式場におけるノロウイルス食中毒対策」を、より幅広く活用いただくために内容を改訂しました。また、文章・グラフ・表などにも手を加え、より読みやすく、理解しやすい実用書となっています。

発行日:平成25年2月改訂 サイズなど:A5判 34ページ 発行部数:2,000部 頒価:200円

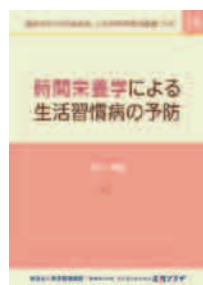
出版関連

幅広く健康・生活情報を提供

平成20年度よりセミナーの講演内容を小冊子にし、予防医療の普及・啓発に努めています。また、平成22年度からの「食品と環境」衛生講座シリーズでは、食品従事者向けにノロウイルス食中毒の予防と対策を啓発する小冊子の改訂版を発行しました。

■働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり⑬～⑭

人生80年時代の健康をキーワードにテーマを検討し、今年度は2回のセミナーを開催、その講演録を作成しました。寝たきりにならないために、運動機能を維持するためのロコモ対策と、メタボ対策としてこれまではあまり知られていなかった、いつどのように食べるのが心身の活力や健康によいのか、時間遺伝子の働きから紹介した時間栄養学がシリーズに加わりました。



新刊 発行日：平成25年3月 サイズ：A5判 ページ：⑬46ページ、⑭45ページ
発行部数：各2,000部 頒価：⑬300円 ⑭350円

- ⑬働きざかりから始めるロコモ対策—いつまでも自分の足で歩くために—
泉田 良一（江戸川病院 慶友人工関節センター長、ロコモ チャレンジ！推進協議会 委員長）
- ⑭「時間栄養学による生活習慣病の予防」
香川 靖雄（女子栄養大学 副学長・栄養学部教授）

■バックナンバー

○働き盛りから始める、人生80年時代の健康づくり①～⑫

- ①「元気な高齢期は一日にしてならず」
- ②「男と女の更年期—ケアとつきあい方」
- ③「睡眠障害とこころの病—事例と対策—」
- ④「働きざかりから始める歯周病対策 生活習慣病の黒幕—それは歯周病!」
- ⑤「働く人のストレス対策—うつを防ぐセルフケア—」
- ⑥「メタボ・うつと睡眠障害 予防と対処法」
- ⑦「働き世代の疲労対策 疲れのメカニズムとセルフケア」
- ⑧「静かに広がる、働き世代のアルコール問題! ～依存症にならないために」
- ⑨「ここまでわかった! 食生活改善とがん予防」
- ⑩「あなたの腸は大丈夫? 大腸がんと過敏性腸症候群 (IBS) 対策」
- ⑪「なぜ減らない! 糖尿病の実態と予防対策」
- ⑫「働き世代の心臓病・脳卒中对策～コレステロールとどう付き合うか」

○「食品と環境」衛生講座シリーズ

- ①「食品従事者必携：ノロウイルス食中毒 予防と対策」
- ②「リスク管理としてのシックハウス対策」
- ③「食品微生物検査を知ろう～食品従事者の皆様へ」
- ④「食品に発生するカビとその防止」

※冊子の詳細はホームページでご確認ください (TOP>公益事業>出版物)

◆人気のシリーズ、実用書としても活用

小冊子の24年度販売部数は2,894部。23年度から毎年2,500部以上をご購入いただいております。HPやセミナー会場における販売、新聞や雑誌の告知記事からも多数の注文を頂きました。

衛生講座シリーズは、講習会の教材として使われるなど、実用書として活用されています。

■平成23年度 事業年報

両法人の事業案内およびデータベースとして使用することを目的としています。付属のCD-ROMには本編とデータ編、「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」の受賞記念講演会の講演録をPDFで収録し、適宜抜き刷りが可能です。本年度は、これまで文章と図表のみだった「トピックス」や「研究報告」のページに写真を掲載し、内容をより分かり易くしました。



新刊

発行日：平成24年8月30日
サイズなど：A4判 206ページ
本編・データ編CD-ROM付属
発行部数：1,000部
配布先：契約先、関係行政機関、
関係研究機関、関係団体など

公益事業については、下記を掲載しました。

〈平成23年度 公益事業研究報告〉

- ① 子宮頸がん検診者におけるHPV感染者の把握とTypingの調査・研究
- ② 尿中ミオイノシトールの実用化に向けた応用研究—その2
在宅食事負荷試験による尿中ミオイノシトール (UMI) 測定と耐糖能の関係：非観血的な耐糖能低下者のスクリーニング (その2)
- ③ 乳酸処理による鶏肉および体のカンピロバクター除菌効果の検討
- ④ 食品微生物検査における損傷菌問題
- ⑤ 食品中のトランス脂肪酸分析法の検討および含有実態調査
- ⑥ 檜原村民に安全でおいしい水を提供するための基礎調査
- ⑦ パッシブサンプラーを活用した総揮発性有機化合物 (TVOC) 測定法の開発

〈遠山椿吉賞受賞記念講演会 講演録〉

■第2回 健康予防医療賞

「骨粗鬆症診療体制の確立にむけての臨床疫学コホートの構築 (Nagano Cohort 研究)」
口受賞者 白木 正孝 (成人病診療研究所 所長)

■第2回 健康予防医療賞 特別記念賞

「生活習慣病の時代的変遷およびその現状と課題に関する疫学調査 (久山町研究)」
口受賞者 久山町研究グループ (代表：清原 裕/九州大学大学院医学研究院 環境医学分野)

■公益事業レポート2011

公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。ステークホルダーの皆様に対して、当法人・医療法人の公益事業の情報開示に役立てられています。



新刊

発行日：平成24年5月21日
サイズなど：A4判 20ページ
発行部数：3,000部

※事業年報、公益事業レポート以外の出版物は 当法人ホームページよりご購入いただけます。

インターネット による 情報提供

■メールマガジンによる 普及啓発

メールマガジン「元氣プラザだより」は、本年度、「毎日の生活に役立つ」3つのコラムを連載しました。

コラム「元氣プラザドクターの健康相談室」では、働き盛りの読者にドクターが様々なアドバイスをを行うという内容で、夏バテ対策やインフルエンザ予防策など季節の話題や、健康診断の活用法といった、健康づくりのための実用的な内容を掲載しました。

管理栄養士・健康運動指導士が執筆するコラム「教えます、あなたを健康にするちょっとした工夫!」では、食生活と運動の両面から、健康生活のための誰にでもできる工夫を紹介しました。

また、新規コラム「知っておきたい、食品の安全と生活環境衛生のいま」では、当法人 食と環境の科学センターの専門知識をもつ執筆者が協力。放射性物質による食品や環境の汚染など話題のテーマや、100℃に加熱しても死なない食中毒菌など、新たな知識の普及啓発に努めました。

食と環境、健康に関する情報発信とメールマガジンの運営・管理

東京顕微鏡院のホームページでは、食や環境衛生思想の普及啓発を目的として「トピックス」を掲載しています。24年度は7月の生食用牛レバーの禁止、8月の漬物による腸管出血性大腸菌O157食中毒の発生（北海道）といった事件に対応して速報記事を掲載し、情報提供を行いました。また、元氣プラザのホームページでは、暮らしに役立つ健康情報、身近な食の安全と生活環境衛生の知識の啓発を目的として、毎月一回メールマガジン「元氣プラザだより」を発行しています。



(元氣プラザHPより)



(東京顕微鏡院HPより)

両法人のホームページからセミナーや人間ドック、健康診断を申し込む際に、メールマガジンの申し込みができるようにしたため、発行数は、平成23年3月号の1,828名から、平成24年3月号の2,788名へと飛躍的に伸びています。平成25年度も、管理栄養士のオリジナルレシピを毎月紹介するコラムの掲載など、健やかな暮らしに役立つ情報提供に努め、新たな読者層の開拓を目指しています。



■「遠山椿吉記念館」サイト

本年度は上水協議会※の歴史などを追加し、リンク先に(公社)日本水道協会や(公財)結核予防会結核研究所、遠山椿吉の郷里である山形県山辺町を追加しました。

※(公財)日本水道協会の前身。当時「水道水質試験法」の統一を主唱していた、東京市衛生試験所長遠山椿吉の呼びかけにより、1904(明治37)年に設立。

「Our Credo」公益会議メンバーの共通認識を文章化し、これを拠り所とした活動を積み重ねています。



私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

運営方針

多くの人の知恵を集めるとともに、公益会議における意見交換を通して、より良い公益事業の実現に努めます。

公益委員は、

自らの仕事で得た知見から、公益会議で意見を述べ、セミナー運営や、ワーキングプロジェクトに参加し、職場と公益事業活動の橋渡しに努めます。

公益事業室スタッフは、

公益事業を企画し、公益会議で説明し、公益委員との議論を通して公益会議で得た意見を、より良い公益事業の創造と運営に生かします。

公益委員

- ・ 自分の日々の仕事をこなすだけでなく、その仕事のなかにある「公益性」を考えます。
- ・ 自分の仕事と「公益性」の関連から、公益事業を構想し、その公益事業の実現に努め、社会に貢献します。
- ・ この考えを周囲に、波及させていきます。



「すべての人びとのいのちと環境のために」
For Life and Environment of All People.

法人名称変更：April 2013
制定：March 2010

地域貢献

次世代を担う子どもたちへ

平成18年より日本橋研究所近隣の小学校5・6年生を対象に「夏休み子ども研究者体験」セミナーを毎年実施し、本年度は新設された豊海研究所で7年目を迎えました。子どもたちにサイエンスを学ぶ楽しさ、食品の安全性や健康に関心を持つキッカケになることを願って継続しています。また、平成19年より千代田区立九段中等教育学校の課題解決学習に協力し、次世代を担う子どもたちを対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

■平成24年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー

白衣を着て、手についた菌や食べ物に含まれる色を観察しよう！
～試してみよう！色の変化でわかる検査～

■A日程：8月2日(木)～3日(金) ■B日程：8月7日(木)～10日(金)

◎会場：豊海研究所 4F 会議室～実習室 ◎参加人数：34名(中央区の小学5・6年生)

◎講師・協力：公益委員、調査研究室、食品微生物検査部、食品理化学検査部

◎後援：中央区教育委員会 ◎参加校：日本橋小学校、久松小学校、泰明小学校、中央小学校、明石小学校、京橋築地小学校、常盤小学校、佃島小学校、月島第一小学校、月島第二小学校、月島第三小学校、豊海小学校(12校)

■地元中学生の校外学習に協力

九段中等教育学校総合学習「都市と環境」の一環として、5名の1年生が豊海研究所を訪問しました。6年目となる今年の課題は「食品の表示から安心安全を学ぼう」。中里光男部長の出題で、食品表示の目的や表示事例、賞味期限と消費期限の違いなどを学びました。



チョコレートから着色料の「色」の成分を取り出しました

手洗いの前後で菌の数を比べる検査をしました

酸素がなくても生きている菌を発見

理化学検査室を見学

平成24年度 夏休み「子ども研究者体験」セミナー

1日目 10:00～12:00

- ① 手に付いた菌を数えてみよう！
- ② 空気だけでなく水でも育てる菌を数えよう！
- ③ 食べ物に含まれる色素を取り出そう！
- ④ 食べ物に含まれる色素を数えよう！

2日目 10:00～12:00

- ① 食べ物の中の「菌」を数えよう！
- ② 食品から抽出した色素で着色・染料・顔料の色を数えよう！
- ③ 食品検査の実際：検査官の役割

12:00～13:00 昼食・お昼休み

13:00～15:45

- ④ 手に付いた菌の数を数え、結果を比較しよう！
- ⑤ 酸素がなくても生きていく菌(嫌気性菌)を発見しよう！
- ⑥ 空気だけでなく水でも育てる菌を数えよう！

15:45～16:00 施設内の見学 終了挨拶 記念撮影

スタートして7年目となった子どもセミナー。今年度より、研究所が豊海に移転しましたが、中央区全16小学校のうち、12校から約50名の参加応募がありました。

本年度もテーマを「色」に絞り込み、ペーパークロマトグラフィーという分析法により、カラフルなチョコレートの着色料の成分を取り出し、合成着色料の使用を確認しました。更に、天然素材の色素を使った検査として、紫キャベツから取り出した「紫色」と、カレーに使われる香辛料のターメリックから取り出した「黄色」を利用して、リトマス試験紙を作り、身の回りの食品が酸性かアルカリ性かを調べる実験にも取り組みました。

また、酸素がなくても生きている菌(嫌気性菌)を観察する培養検査にも取り組みました。

二日目には、豊海研究所内を見学し、ペーパークロマトグラフィーで実際に食品の着色料を検査している様子や、食品の安心安全を守る様々な検査の様子を学びました。

参加者より「酸素がないのに生きている菌がいるなら、宇宙には菌の様な生物がいるのかもしれない」「検査の精度を管理するために、空調や日差しもコントロールされている最新の検査室がすごかった」など感想が寄せられ、新しい施設での検査体験は強く印象に残ったようです。



体験の最後には、修了証を授与しました



課題の説明



施設内を見学

生徒たちは帰校後、同学年へのアンケート調査をもとに消費者の意識、食品表示の目的等についてディスカッションを行い、2月1日(金)に豊海研究所を再訪問。課題の発表を行い、評価を受けました。この考察を通して、食品表示の意味や安心安全のしくみを理解できたようです。

さらに3月22日(金)、学内を開放して開かれた学習発表会では、構成の変更など、豊海研究所での評価を改善につなげ、訪れた父兄や同級生に発表を行いました。



校内で開かれた学習発表会

組織の活性化

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの拠り所に

公益事業は一般財団法人の基幹事業であり、東京顕微鏡院をルーツとする当医療法人の精神基盤として重要な位置を占めています。

創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生向上のため、先駆的な視点から発信することに努める、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

■公益委員

私たちの公益事業は、両法人各事業部門の代表として理事長通達で任命された公益委員と公益事業室スタッフにより、公益会議で討議され、運営されています。



公益会議キックオフ

本年度は、ニュースレターの改革と、セミナー等の企画・運営を行いました。組織活性化を目指して、年度初めと年度末に公益委員のヒアリングを実施し、継続的に、運営方法の改善につなげています。部門横断的なコミュニケーションを通して風通しの良い企業風土を醸成し、組織活性化に生かせるよう努めています。

□平成24年度公益事業委員（五十音順）

◎東京顕微鏡院：金子旬一（経営管理部）、川崎千珠子（環境衛生営業部）、小林恵美（衛生検査管理部）、平賀真基（食品安全サポート部）、森哲也（調査研究室）

◎こころとからだの元氣プラザ：伊藤敦子（生理機能検査科）、五十嵐香子（健康づくり営業部）、栗原達哲（細胞病理診断科）、佐藤壮（巡回・調整部）、高橋照美（婦人健診）、樋口昭美（診療部）

■LeapをOnenessに統合

公益委員アンケートやディスカッションを通して新企画を組み入れ、創刊5年目の公益ニュースレターLeapを創刊6年目の社内報Onenessと統合して、コスト効率化と読者拡大を図りました。

職員の参画する企画を組み入れるなど、本広報誌を両法人の多彩な業務内容を共有するツールと位置付け、継続的な改善活動を行っています。



発行：2012（平成24）年 夏
サイズなど：A4判 12ページ
発行部数：1,500部



発行：2013（平成25）年 冬
サイズなど：A4判 20ページ
発行部数：1,500部

◆タイトル：「専門的な健康サポートを多くの方に健康支援部」「栄養成分検査について知ってみよう」「巡回健診を支えるのは一業務調整部」「貝毒検査を知ってみよう」/ 情報交換ひろば「子宮頸がんワクチンの副作用？ 回答：婦人科・理事 大村肇夫」「福島原発事故 10年後の健康影響？ 回答：京都大学名誉教授 渡邊正己」「スプレー式除菌消臭剤は安全？ 回答：技術顧問・千葉大学客員教授 瀬戸博」

■夏休み「元氣プラザ 親子セミナー」

白衣を着て検査技師を体験しよう！

～アジ君とミカンちゃんの健康診断～

- ◎対象：当法人で働く関係者・家族
- ◎講師：及川孝光統括所長、公益委員、検査部、臨床検査部、看護部、診療部
- ◎教材開発：公益委員、公益事業室スタッフ
- ◎開催日：7月28日（土）14:00～17:00
- ◎会場：飯田橋 元氣プラザ 1F会議室・2F・4F
- ◎参加者：15名

体験テーマ：

- ① 病気を見分ける仕事を知ろう
- ② 体の中を見ているいろいろな検査を知ろう
- ③ X線検査を体験しよう
- ④ 細胞診検査を体験しよう
- ⑤ 生理機能検査を体験しよう
- ⑥ 尿と便の検査を体験しよう
- ⑦ 血圧・心拍数を測ってみよう

健康診断で何が分かるのかを実際の検査機器を使って体験学習が出来た親子セミナーは本年度で4回目を迎えました。当日は元氣プラザの至急検査室で尿検査を見学。尿を顕微鏡で見た、顕微鏡内の映像がパソコン画面に映し出されると、歓声があがりました。

また、X線検査と超音波検査の性質の違いを特製のゼリー検体で確認しました。健康について親子で話し合う貴重な体験となりました。



血圧と脈拍を測定



尿を顕微鏡で観察



検体ゼリーの内部が超音波で映し出されます



■夏休み「豊海・親子施設見学セミナー」

- ◎対象：当法人で働く関係者・家族
- ◎講師：有馬和英事業部長、食品理化学検査部、食品微生物検査部
- ◎開催日：8月4日（土）10:30～12:00
- ◎会場：豊海研究所4～6F ◎参加者：7名

見学のテーマ：

- ・食品の安全を見分ける仕事を知ろう
- ・食品に書かれている表示で、何がわかるのかを知ろう
- ・日本で食べられている食品は、どこの国から来るのかを調べてみよう
- ・検査の現場を見てみよう

本年度は5月に豊海研究所がオープンしたことから、試験的に両法人で働く皆さんの家族を対象にした施設見学セミナーを実施しました。

日本には世界中からいろいろな食材が輸入されていることを座学で学び、普段は入れない食品衛生検査施設を、親子で見学しました。食品の表示にはいろいろな検査結果が書いてあることも学習しました。

■参加者の感想

- ・輸入食品が多くて驚きました。きんとかを調べたりするのがすごいなと思いました。
- ・お父さんがどのような仕事をしているのかがわかった。ぼくもお父さんみたいになれたらいいな。
- ・自分の職場を多くの家族に見ていただきたい。



受付で記念写真をパチリ！



マイナス22度の冷蔵庫も体験しました



見学通路から微生物検査の様子を見ました

第三者の声

「これからの両法人に期待すること」 創立120周年記念誌より抜粋

創立120周年記念誌巻頭に、両法人を知る各界の方々より特別寄稿をいただきました。
(順不同)

遠山椿吉博士が拓いた「泉」よ、さらに

——— 元東京都副知事 吉川 和夫



遠山椿吉博士は、私自身43年もの長きにわたり勤めた都庁の先輩でもあり、明治24年に、日本でも公衆衛生の向上を図りたいということから、ほかの2名の方と共に「顕微鏡検査所」という「泉」を拓かれたということの「意義」の崇高さ、さらに平成20年、皆さんは、「遠山椿吉賞」を創設され、博士に続く、「若い泉」を拓かれようとされており、極めて素晴らしいことですね…とつたない表現で挨拶をさせていただきました。今でも、そのように思っております。どうか、引き続き「泉」から湧く、滔々とした「健康増進」に資する「清水」をあまねく日本全国に、1300万都民に、広く配って差し上げていただければと心から期待申し上げます。

遠山椿吉博士のルーツからの発信

——— 山形県山辺町長 遠藤 直幸



遠山椿吉博士は1857(安政4)年当時の山野辺村の代々医術を業とした家に生まれました。漢方医ながら進取の氣に富み蘭方外科を学んでいた博士の父5代遠山元長のことばに、「ひとしく仁術を業とするもの命のあらん限りは、心はここに委ねて生命を保全せんと欲す」とあります。山辺町では遠山椿吉博士生誕の町として、博士に続く人材育成と健やかで安心して暮らせるまちづくりを一層推進して参る所存でございますので、関係皆様方との今後の更なる交流連携をご期待申し上げます。

これからも両法人の公益事業の推進に期待します

——— 全国社会保険協会連合会 理事長 伊藤 雅治



遠山椿吉賞は食と環境の科学賞、健康予防医療賞の2つの柱があります。この2つはこれからもわが国の健康領域の最も重要な課題であり、顕彰する意義はこれからも大きいと思います。わが国はこれから2025年に向けて世界でどの国も経験したことのない早いスピードで高齢化が進みます。今医療を取り巻く関連業界では、このような取り組みに対するわが国の経験と実績を、アジア諸国の高齢化対応への貢献につなげ、わが国自身の成長の起爆剤にすることが望まれている。そのような視点から東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの両法人の今後の活動を期待しています。

これからの両法人に期待すること

——— 独立行政法人年金・健康保険福祉施設整理機構理事長、
名誉WHO西太平洋地域事務局事務局長 尾身 茂



遠山博士は、二千余名に及ぶ医療技術者を養成し、医学検査の実践普及、結核予防、細菌学や脚気の研究、学会誌発行、健康診査、衛生思想普及活動などを推進されました。感染症対策及び公衆衛生などに携わってきた筆者にとっては、時代を先取りした遠山博士の活動に心より敬意を表したいと思います。デカルトの時代には、こころとからだについて二元論的な考えが主流でしたが、「病は氣から」と言われるごとく、こころとからだは不可分であることが最近の医学は証明しております。「こころとからだの元氣プラザ」に対するニーズは、これからの社会ではますます高まることが予想されます。

創立120周年を記念して

——— 国立感染症研究所 所長 渡邊 治雄



現在では、コレラ、赤痢のようないわゆる「伝染病」は、わが国ではほとんど問題とされなくなってきております。しかし、一方では、HIV、SARS、腸管出血性大腸菌感染症、新型インフルエンザなど数えきれないほどの新たな病原体がヒトの健康に影響を与えてきています。それら感染症を制御するための努力を果たしていくことが現在を生きている私たちに強く求められております。現代こそ「健康な命」と、それを支える「生活環境衛生」の維持・向上・増進をめざし、社会福祉に貢献するとの理念を掲げる東京顕微鏡院とこころとからだの元氣プラザの役割は益々大きくなってきていると思われます。

東京顕微鏡院の創立120周年に寄せて

——— 国立大学法人 東京大学医学部附属病院 病院長 門脇 孝



私と東京顕微鏡院との出会いは、約30年前、小坂樹徳教授が主催されていた東京大学第三内科の糖尿病グループに私が入れていただいた時に遡ります。当時、糖尿病グループでは既に、東京顕微鏡院の糖尿病の健診・事後指導を担当し、私もその一員を務めました。現在でこそ、特定健診・保健指導など糖尿病予防に取り組む制度がありますが、糖尿病の予防から早期診断・早期治療に力を入れた東京顕微鏡院の活動は、この当時としてはわが国でも大変先駆的なものでした。東京顕微鏡院のもう一つの出会いは、遠山椿吉記念健康予防医療賞の選考委員を務めたことです。遠山椿吉賞が、わが国の疫学、公衆衛生学、予防医学の分野の将来を支える若手の研究者の目標や励みとなり、人材育成に大きく資することを念願しています。

輸入食品の安全性確保にあたって期待すること

厚生労働省 小樽検疫所長・前 食品安全部監視安全課長 加地 祥文

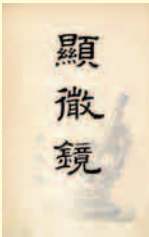


検疫所で行う検査(モニタリング)のうちで、一時的に検査件数が増加する項目や特殊な検査項目については、登録検査機関にアウトソーシングできる制度が導入され、行政検査の一翼を担ってくれています。このように、時代に沿って、国、自治体等の行政機関と民間検査機関が、互いに補い合い、助け合いつつ、一緒の目的である国民の健康を守る公衆衛生活動を行ってきたといえるでしょう。検査項目や件数は食品事件、違反の実態によってはげしく変化するものですので、検査機関におかれましては、得意とする検査分野の専門性をさらに磨くと共に組織の柔軟性も必要とされることでしょう。貴両法人の人材、設備、能力が、ますます期待されるわけですが、三巡目にあっても、どうか十分の自信をもって、一層の御奮闘を心から祈念しております。

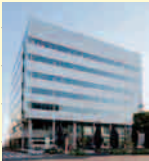


東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業

～3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		【戦 前】	普及啓発活動、出版、その他公益事業 など
		1800年～	
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった 成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始 病原的黴菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売 細菌検査の実務指導を行う講習科を開講 名称を東京顕微鏡院と改称 種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	 東京顕微鏡院講習科第1回卒業式 (1892年)	1891(明治24)年	 「顕微鏡」第1号 (1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」 に改称し、1944(昭和19)年 戦時統制令で休刊するまで 50年間発行
		1892(明治25)年	
		1894(明治27)年	
		1895(明治28)年	
		1896(明治29)年	
飲料水の検査を開始 母乳検査を開始 事業拡大にともない、神田区小川町に移転		1899(明治32)年	機関誌「顕微鏡」第1号発行 啓蒙用幻灯映画製作 「顕微鏡の祖」マルピギー200年記念式典、本院にて挙行 コレラ講習会を開催 回帰熱講習会を開催 ベスト講習会を開催
		1900年～	
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる ベスト試験室を新設 遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される 保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と 衛生上の協議(衛生相談)を開始 遠山椿吉院長、東京市参事会より独ベルリン市開催万国衛生および 民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる 同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を嘱託(翌年帰国) 遠山椿吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる	 来日したゴッホ博士を囲む生花の会(於帝国ホテル) 前列左からロベルト・ゴッホ博士、北里柴三郎博士 後列左から2人目が遠山椿吉	1903(明治36)年	 「結核征伐の歌」
		1907(明治40)年	
		1908(明治41)年	
		1914(大正3)年	
		1915(大正4)年	
(院長、長年来の研究による)脚気治療薬うりひんを製品化 9月1日関東大震災により、院舎およびその設備を すべて焼失。9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、 10月1日一般業務を再開 内務大臣より財団法人の設立許可を受ける 遠山椿吉、肺がんのため遠逝享年71	 うりひん広告	1921(大正10)年	 「遠山博士脚気病原因之研究」
		1923(大正12)年	
		1927(昭和2)年	
		1928(昭和3)年	
		1929(昭和4)年	
レントゲン深部治療開始 戦災により、以後10年にわたり事業中断	 震災後に復興した東京顕微鏡院本院 (1925年竣工)同年、病理組織検査開始、 レントゲン科新設	1930(昭和5)年	第1回脚気無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部) 結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
		1935(昭和10)年	
		1945(昭和20)年	
		【戦 後】	
		1954(昭和29)年	
遠山正路院長より事業を継承 診療所を開設、細菌検査所を再開 職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始 臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大 東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続) 建替えによる新院舎完成。人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録 食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設 がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	 旧院の様子 (1970年)	1955(昭和30)年	 「小笠原健康な村づくり事業」(1978年～)
		1967(昭和42)年	
		1972(昭和47)年	
		1974(昭和49)年	
		1975(昭和50)年	
		1976(昭和51)年	離島村民の健康管理を目的とした「小笠原健康な村づくり事業」を開始 「小児ぜん息母親教室」、食品衛生セミナーなどを開催
		1978(昭和53)年	

歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)
創立者(院長)	遠山 椿吉 1891～1928年	第5代(理事長)	山田 匡蔵 1967～1989年
第2代(院長)	遠山 正路 1929～1954年	第6代(理事長)	山田 和江 1989～1995年
第3代(院長)	細谷 省吾 1955～1957年	第7代(理事長)	下村 満子 1995～2007年
第4代(院長)	高橋 悌三 1957～1967年	現理事長	山田 匡通 2007年～

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益事業 など	
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)	1979(昭和54)年		
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61)年	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」を開催	
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62)年	学術普及誌「健康と環境」創刊(～2000年)	
 簡易専用水道検査 (1979年～)	1991(平成3)年	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」を開催	
	1992(平成4)年	シンポジウム「ベイブリッジフォーラム'92 ー21世紀への対がん戦略」を開催	 ベイブリッジフォーラム'92 21世紀への対がん戦略
		平成4年度より事業年報の発行開始	
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設 (2001、2002、2005年に順次拡大)	1996(平成8)年		
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1997(平成9)年	シンポジウム「新時代の高血圧管理」職場と住宅環境を考える」などを開催	
会員制人間ドックを開始	1998(平成10)年	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」 「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催	
		2000年～	
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大 トータルヘルスセンターBe-Well!、 女性のための生涯医療センターViViを開設	2001(平成13)年	創立110周年記念日米メディカルシンポジウム 「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催	
 こころとからだの元氣プラザ (2003年～)	2002(平成14)年	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」を開催	
	2003(平成15)年	女性のための生涯医療センターViVi 開設1周年記念シンポジウム 「アダムとイブの医療革命」を開催	
	2005(平成17)年	東京顕微鏡院創立115年、こころとからだの元氣プラザ創立3年 記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催	
立川研究所を一ヶ所に統合拡大 こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)と市ヶ谷本院の施設再配置 こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)外来診療と 女性のための生涯医療センターViViを統合	2007(平成19)年	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来 ーなぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催	
	2008(平成20)年	遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設	
	2009(平成21)年	「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、 同奨励賞を川崎晋氏に授与 遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム「東京の水の源流を探る ～豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水～」を開催	
こころとからだの元氣プラザ、アジュール竹芝総合健診センターの運営を受託 臨床検査部がこころとからだの元氣プラザの組織に移行 三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2010(平成22)年	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、 同特別賞を中村雅一氏に授与	
3月11日 東日本大震災により、 創立120周年記念式典・祝賀会、創立120周年記念顧客イベント中止 4月1日 創立120周年	2011(平成23)年	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、 同特別賞を小泉昭夫氏に授与 創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・ 予防戦略ー研究・治療・ケアの最前線から」を開催	
創立120周年記念年頭式 豊海センタービル竣工 日本橋研究所が施設拡充に伴い、豊海研究所に移転	2012(平成24)年	「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を白木正孝氏、 同特別記念賞を久山町研究グループ 代表 清原 裕氏に授与	
 豊海研究所 (2012年～)	2013(平成25)年	「遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞」を小西良子氏、 同功労賞を石川哲氏に授与 「創立120周年記念誌」を刊行	 遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞 (右:小西氏 左:石川氏)

Our Credo 私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。



発行:

一般財団法人 東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 <http://www.kenko-kenbi.or.jp/>

医療法人社団 こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 <http://www.genkiplaza.or.jp/>

問合せ先: 三橋 祥江 制作: 水戸 純一、田中 榮治、八木 忍、飯島 敏樹 デザイン: 金沢 謙児

2013.5.20発行